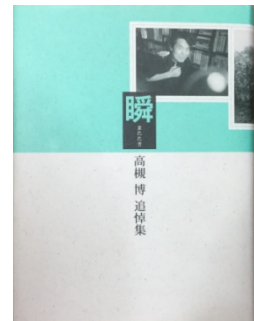


瞬—またたき— 高槻博追悼集

石川洋明さんの「あれから 2 年」を書いた後、書棚にあった表題の追悼集を手にした。1998 年に刊行された、350 ページほどの分厚い追悼集の「刊行委員」の一人として、私も名前を連ねている。これには「わけ」がある。追悼集に寄稿した拙文を書き写しておきたい。

名古屋市立大学の人文社会学部が創立されてから 2 年半近く経った。毎日新聞の高槻博さんには、第 1 期の現代社会学科の学生に「現代環境問題」を担当していただいた。学部創設の場合には、担当者ごとに業績目録などを文部省に提出して、審査に通らなければならない。忙しいなかで膨大な書類を作成してもらい、厳しい審査を経て非常勤講師としての就任が決まった。



96 年夏、名古屋特有の厳しい暑さのなかで、2 回に分けて集中講義をしていただいた。『エコノミスト』の「編集部から」でも述べられているように、夏休み中ということもあり、受講者はあまり多くなかった。教室まで案内したとき、少ない学生に恐縮したのを覚えている。悩ましい私語がなかったように、環境問題に興味をもった熱心な学生が受講した。追悼集の刊行にあたり、受講した学生に講義ノートを見せてもらおうと、現代環境問題がじつに体系的かつ問題提起的に講義されていた。当然ながら学生の評判も良くて、次年度にはさらに多くの学生が受講してくれることを願った。

それが 97 年春、「今年も講義できることを楽しみにし、コンテをつくらうとした矢先でしたので、残念でたまりません」という連絡が入った。講義ができないという突然の知らせに驚愕したが、私たちとしては講義の時期を遅らせても実施できないかと考えた。それも無理となり……。こんなわけで、私は高槻さんと接したのは、ほんのわずかな時間だが、思いは深いものがある。じっくりとお話しできなかったのが、いまさらながら悔やまれる。高槻さんの書かれた『ドキュメント日本経済』と『沖縄の経済開発』は手にしていたが、『片足喪失の記』の方は「再発」の連絡を受けてから読ませてもらった。高槻さんを通じて、「生きる」と「生きかた」を考えさせられた。学生をはじめ、多くの人に読んでもらいたい本である。

この追悼集をふくめて、これからも高槻さんから多くのことを学んで、研究や教育に活かしていきたい。高槻さん、短い間でしたが、本当にありがとうございました。

高槻さんは学生時代から経済学者になることを夢みていたという。名市大での集中講義が「最初で最後の講義」であった。講義を熱心に聴き、詳細なノートをとっていた、学部 1 期生の徳野貴則さんも追悼集に寄稿している。

(2016 年 7 月 3 日)